

〔個人研究〕

仏教絵本『栄西禅師』にみるローカル・アイデンティティ

森 覚

1 本論文の目的

近年の地域再生論では、ローカル・アイデンティティという概念に注目が集まっている。エリク・ホーンブルガー・エリクソン (Erik Homburger Erikson 1902～1994) により提唱された「アイデンティティ」は、時間や環境が移り変わっても、連続した同一のものとして個人に保持される、「自分とは何か」、「何をする存在なのか」という自己感覚である。同時に、この概念は、個人的アイデンティティと、その個人が参加している文化のアイデンティティの間に起こるプロセスとされ、社会に承認されている自己という心理的状态を指すものでもある。¹ 用語としては、時間的な連続性と一貫性を持つ個人に「変わることのない本質」が見られるという前提のもと、存在証明、独自性、個性、帰属意識という複数の意味で使われる。²

しかし、イギリスの文化理論家であるスチュアート・ホールは、アイデンティティは根元的な歴史化に従うものであり、たえず変化・変形のプロセスの中にある³とし、今日では、個人と他者との社会的関係性において変化していく意識として捉えられている。

エリクソンは、アイデンティティを、個人が実感する意識として論じる。このため、ローカル・アイデンティティもまた、個人的な問題として扱われる事もあるが、一方でそれは、集合的な体系的観念としても、頻繁に用いられている。ローカル・アイデンティティには、一人ひとりが選択的に保持する、特定の地域への帰属意識・愛着・誇りという個人レベルが設定できる。加えて、特定地域に関係する人々の多くが共有する事で形成される、「地域の個性」「地域の要素」といった特有の全体的特性という集合レベルも定義され、一つの概念に、二つの意義が内包される。⁴

こうしたローカル・アイデンティティの性質は、カルチュラル・アイデン

ティティと呼ばれる概念との類似性が見られる。前述のスチュアート・ホールは、普通の「ひとつのもの」、他のすべての表面的な差異の下にある文化的な帰属を安定させ、固定し、あるいは保証する自己ではない⁵ものとして、アイデンティティを定義する。他方で、集合レベルに置けば、この概念は、決して統一されたものではなく、最近においては次第に断片化され、分割されて⁶おり、決して単数ではなく、さまざまで、しばしば交叉していて、対立する言説・実践・位置を横断して多数に構成される⁷としている。

社会学者の大堀研は、こうしたホールの見解を踏まえ、「個人レベルと集合レベルとが関連しつつ形成される」⁸、地域の良さと悪さという正負の二面性を具える複合的な自己認識として、ローカル・アイデンティティを位置づける。その上で、地域再生論においては、地域の自己認識を深化させる議論の文脈で、この用語が使われるとしている。⁹

ローカル・アイデンティティは、諸個人それぞれに異なる多様な意識である。しかしながら、これは、マスメディアを通じて伝達され、拡散される、特定地域の歴史や文化等の情報を受容した多くの人々が共有する、集合的表象として浮かびあがる事もある。¹⁰ また、ローカル・アイデンティティが成立する背景的要因である自然環境、歴史、文化等は、地域の独自性を具現化させる象徴として観光資源化され、対外的に伝達される場合もある。事例としては、各地の歴史や文化を紹介するテレビや雑誌の旅番組や、観光PRのパンフレット等があげられる。他方で、それとは反対に、居住する場所の歴史・文化を学ばせるために制作された、地域内部向けの郷土教育的出版物もある。

本論文では、そうした郷土を題材とする出版物の一種として、『栄西禅師末法の世を生きた大きな心』という仏教絵本を取りあげる。これは、日本臨済宗を開いた明庵栄西の生涯について語る宗祖伝絵本であると共に、九州地方における禅文化の展開を伝える作品となる。論考では、ローカル・アイデンティティ論の観点から、特定の地方で活動し、地域の独自性を強調する仏教的偉人伝として、栄西の物語がいかに絵本化されているかについて、各画面の表現を考察しながら論証していく。これにより、仏教的視点から地方

文化を再発掘し、創生する絵本表現の様相について明らかにしたい。

なお、明庵栄西という名前には、幾つかの呼び方がなされている。¹¹ しかし、この論考では、考察する作品タイトルとの整合性を図るため、「えいさい」という呼称に統一する。

2『栄西禅師』という作品

2-1 書誌情報

『栄西禅師 末法の世を生きた大きな心』は、1991年に、福岡市中央区の出版社である石風社から刊行されている。32ページにある「あとがき」には、この絵本を制作した動機として次のような文章が記されている。「今年は栄西禅師のお誕生日からちょうど八百五十年になります。そして四年後の平成7年は、この「禅の開創」聖福寺の創建以来、八百年に当たります」。つまりこの作品が出版された年は、栄西生誕850年の節目にあたり、また、絵本制作が、聖福寺という仏教寺院の創建800年記念を見据えて取り組まれたものである事が、ここから明らかとなる。書籍の形態として、本のサイズは、縦が24.5センチ、横が21.5センチであり、開閉方向は右開きである。全32ページの紙面構成は、見返し－扉－本文－あとがき－奥付－見返しという順序であり、全16画面の図像が配置された本文の物語部分は、15の見開きによって展開する。また、本文部分は、①物語の導入－②誕生－③修学－④師匠・静心の死－⑤密教の修行－⑥都比叡山延暦寺の荒廃－⑦博多からの入宋－⑧渡航の安全祈願－⑨一度目の入宋と背振山の茶栽培－⑩二度目の入宋時における虚庵懷敞との出会い－⑪虚庵懷敞の下で禅の修行－⑫「お悟りの系図」を与えられ日本へ帰国－⑬九州における禅宗寺院の創建と禅宗禁止令－⑭聖福寺の創建－⑮教訓的メッセージという流れのシーケンスになっている。この物語構造は、1916年に刊行された木宮泰彦の『栄西禅師』¹²に見られる記述と類似しており、創作においては、栄西の行状をまとめた先行文献が参照されたものと考えられる。

2-2 作者と出版社

絵本の文と絵には、それぞれに作者がいる。文章を手がけたのは、対雲室善来という臨済宗の禅僧である。諱は宗永、道号は善来、室号を對雲虎嘯室、俗名を山岸永夫という。1926年4月28日、長野県須坂市横町で出生。1937年に先祖の菩提を弔うため、木曾興禅寺の松山宗純に就いて出家するが、1943年、師匠の急逝に遭遇し、求道の一念へ火がつく。終戦後の1946年に、京都臨済学院専門学校（現・花園大学）へ入学し、1949年に卒業する。1950年、京都妙心僧堂天授庵で修行に入る。1965年、師匠の暮雲軒絶海文光より「當來隣済在斯中」の密符を受け、鵠林派下隠山系の僧として妙心僧堂を下山。同年11月、愛媛県周桑郡小松町の仏心寺へ入山し、翌年に住職となる。1973年には、福岡県博多にある安国山聖福寺へと入り、1975年、第132世住職に就任している。¹³ 1997年（平成10）、聖福寺を去り、2011年には、移住先の小布施で、松林寺を開山落慶している。¹⁴

一方、絵の作者である働正は、福岡を拠点とし、1957年に結成された前衛美術家集団の「九州派」¹⁵で活躍した熊本県出身の芸術家である。1965年より、大牟田市で児童美術教育に携わり、絵画教室の西部美術学園主宰となる。書籍の挿絵も手がけており、代表作には、葦書房の『小さなポケット』や、石風社の『海にねむる龍』などがある。¹⁶

絵本『栄西禅師』を発行した石風社は、九州福岡の地方出版社である葦書房で7年間勤務した福元満治が、1981年に設立した出版社である。1989年、アフガニスタン難民への医療活動を行う医師の中村哲が著した『ペシャワールにて』の出版が縁となり、現在は、中村のNPO法人「ペシャワールの会」の事務局ともなっている。¹⁷

3 栄西の行状に現れる様々な地域

3-1 表紙に描かれる中世の博多

絵本『栄西禅師』の表紙を観ると、画面上部には、黄色い長方形の図形を背景として、「栄西禅師」という大文字の主題と「末法の世を生きた大きな心」という小文字の副題が配されている。タイトル文字の下には、二人の作

者名として「文 対雲室善来」と「絵 働 正」という文字が並んでいる。紙面の大部分は、絵巻物のような鳥瞰的構図をとる港町の絵になっており、それが、裏表紙まで続いている（図1上段）。船がつけられた浜辺には、木造の簡素な小屋が立ち並び、一つひとつが商店として客を迎える。その中心を画面右から左にかけて大通りが貫き、浜辺には、船から荷揚げをする者がおり、路上には、説法をする僧侶や琵琶法師、宋商人の姿が描かれている。水彩絵の具で着色された町の絵は、『一遍上人絵伝 巻4』にある「福岡の市」と描写が似ている。¹⁸ 『一遍上人絵伝』は、一遍の弟子である聖戒が詞書を記し、画僧の円伊が絵を描いた、1299年成立の絵巻物である。「福岡の市」と絵本『栄西禅師』とを比較すると、人物の配置や情景描写は、完全に一致していないが、立ち並ぶ商店の様子や、町並みの画面下に描かれる壺が置かれた小屋など、共通点も認められる（図1）。これがどこの町を描いているのかについては、本文部分の見開き7に、表紙と同じ町の絵と、「博多の港」という記述がある事から、栄西が生きた平安末期から鎌倉期の福岡博多である事が確定できる（図2）。絵本では、当時の博多に見られた風俗を視覚的に提示するため、「福岡の市」をベースにアレンジを加えている。中世の博多に、日宋貿易の拠点となった博多唐房という居住区があったという歴史的裏づけもあり、大通りには、宋商人（図3-1）を配し、平安時代中期以降に現れた琵琶法師（図3-2）を登場させている。¹⁹

3-2 仙厓義梵と博多聖福寺

表紙をめくり絵本の中身に入ると、金色の渦巻き文様が印象的な見返しに続き、「栄西禅師 末法の世を生きた大きな心」という表題、ならびに「文 対雲室善来」と「絵 働 正」という作者名の文字が提示された扉が現れる。画面中央部にある帆船の絵は、形状からして、『華嚴宗祖師絵伝』に見られる遣唐使船（図4）と似ている。

本文最初の見開き1には、物語の主人公である栄西の絵がある（図5）。これに対応する文章は、博多の仙厓和尚という人物の話題から始まる。仙厓和尚とは、江戸時代中期に実在した臨済宗古月派の僧侶であり、禅画の絵師

として活躍した仙厓義梵の事である。仙厓は、11歳頃に、美濃国南部に位置する武儀郡（現・関市）の清泰寺で出家得度している。19歳になると行脚に出て、武蔵国永田（現・横浜市）にあった東輝庵の月船禅慧門下に入る。32歳の時に印可を受けると、39歳で博多の聖福寺の盤谷紹適の法嗣となり、第123世（1789～1811）、及び第125世住職（1836～1838）を務める。40代から洒脱・飄逸な禅画を書き始め、88歳で遷化するまで、多くの作品を残している。²⁰

絵本『栄西禅師』は、文の作者である対雲室善来が、子どもたちに話すという、語りの形式をとっている。

博多の仙厓和尚って、知ってる？

そう、まんがみたいな画を、たくさん描いた聖福寺の和尚さんだね。

おならをこく画や、お小僧さん達が小便のしくらべなぞ、みんなおもしろい画ばかりだ。

でもおもしろいだけではないね。

その仙厓和尚から七代目の善来和尚は、画もへた。いいや描けない。

しかし、お話は小さいころから好きだった。

そこでこれから、仙厓さんで有名な聖福寺を建てた、栄西禅師のお話をしてみようかな。

（『栄西禅師』 p.3.）

上記の引用からも分かるように、作中では、対比的表現が度々用いられている。その最初の部分が、善来の語りとして、仙厓と比べ、自分に画才はないが、お話は、好きであるという記述になる。

また、文章に記される聖福寺は、対雲室善来が住職を務めた福岡県福岡市博多区御供所町にある安国山聖福寺の事である。今日、臨済宗妙心寺派に属するこの寺院は、鎌倉幕府へ言上書を送った栄西が、源頼朝より、かつて宋人が建立した博多百堂跡の地を与えられ、1195年に建立されたと伝えられる。²¹

見開き1では、栄西の存在を図と文で示し、仙厓義梵と対雲室善来、さら

には明庵栄西という三人の禅僧に関連する場所である聖福寺の存在を、あえて物語の導入部で触れる。これにより、絵本の中心的テーマが、どこに軸を置いたものなのかを読者へと伝えるのである。

3-3 吉備津神社と千寿丸

見開き2は、栄西が誕生する場面となる。右ページには、赤ん坊を抱いた女性の絵があり、左側には、杵を手にした神官が後ろ姿で描かれている。1141年、現在の岡山県にあたる備中国の吉備津神社で神主を務める家に、千寿丸という男子が生まれる。ところがこの赤ん坊は、身体が弱く、乳の飲めない状態であったため、わが子を心配した父親が、無事に成長するように、神や祖先へ祈願する。

文章は、「むかしむかし、桃から生まれた桃太郎は、まるまると太った丈夫な子でした。大きくなると、おばあさんにきびだんごをつくってもらい、キジと犬と猿を家来に、鬼ヶ島へ鬼退治に行きました。……」（『栄西禅師』p.4.）という出だしで始まる。この記述により、生まれたばかりの千寿丸は、病弱な身体である事が対比的に強調される。なお、見開き2で、桃太郎に触れられているのは、この昔話が、吉備津神社の主祭神である大吉備津彦大神の吉備征服伝説と関係するためである。²²

3-4 安養寺から比叡山延暦寺へ

見開き3は、少年時代の栄西が、賢い才能を発揮する場面となる。8歳になった千寿丸は、父親から読み書きを習い、「俱舍論の頌」等の難解な仏教経典を読む。11歳からは、吉備郡の日近村にある安養寺の静心という天台僧に学び、13歳になると、比叡山延暦寺で修行を始める。14歳の時、天台僧として出家し、以後、栄西と名乗る。この場面では、備中国で生まれた千寿丸が、地元の仏教寺院で学び始め、地方仏教から、中央仏教を牽引する比叡山延暦寺へと移行していく過程が語られる。対応する絵では、机の上に開いた本を読む千寿丸の姿がある。背景には、金剛界大日如来の姿があり、栄西が密教についてを学ぶ様子を視覚的に提示する（図6）。

見開き4は、僧侶の仲間たちから「あたまでっかちのちびっ小僧」（『栄西禅師』p.8.）と揶揄され、低い身長 of 栄西が思い悩むエピソードとなる。これは、現在に伝わる栄西の肖像が、異様に長く角張った頭部をしているという身体的形状にもとづく。²³ また、安養寺へ来て六年目の時に、師匠である静心が亡くなる。これについて対雲室善来は、「善来和尚も十一歳で、家から二十キロも離れた木曾の興禅寺へ小僧に行き、ちょうど六年目にお師匠さんを亡くし、ほんとうにつらかった。だから栄西お小僧さんのつらい気持ちが、とってもよくわかる」（『栄西禅師』p.8.）という文章を添え、自らの経験を重ねて、栄西の心情を慮る。

見開き5は、師匠亡き後、兄弟子である千命につき、密教の修行を始める場面となる。18歳になった栄西は、千命より「虚空蔵求聞持法」を授けられ、翌年には、比叡山の竹林坊で研究と修行に励む。また、今の島根県である伯耆国の大山へも登り、修行をしている。絵では、登山をする僧侶たちの姿が描かれており、中央仏教の本拠地である比叡山での出来事よりも、大山での修行が視覚的に提示される（図7）。

見開き3から見開き5までは、栄西の仏教修行について語られる。元来、絵本『栄西禅師』に、栄西の事績を辿る目的があることは、あとがきの記述からもうかがえる。

今、私たちのまわりを見まわしてみると、モノがあふれ、あらゆることがお金で解決されようとしております。人々の心はそのきらびやかな身なりとは裏腹に、どこか貧しげにみえます。また世界を見わたすと、争いの火種は尽きぬかのようです。

こういう時代にこそ、あの末法の世を生き抜かれ、真実の仏法を求めるために、中国へ二度も渡って修行された、栄西禅師のご行跡をおしのびするの、あながち無駄なことではないように思えます。

（『栄西禅師』p.32.）

仏教絵本には、日本仏教の宗派を開いた宗祖を題材とする作品が多く存在

する。それらと同様に、この絵本も伝記物語としての性格を具えているが、一方で、他の作品とは、異なる特徴も見られる。それが、栄西に関係した土地が多く出てくる点である。見開き3から見開き5までの各場面では、縁のある様々な地名をあげることにより、栄西の行状に、地域性という要素を加えている。これにより、絵本に出てくる各地は、仏教文化的なローカル・アイデンティティが形成される場所として、読者に認識される。

4 中央と地方の時代的情勢

4-1 中央と地方の信仰文化

見開き6の文章では、青年僧である栄西が上京した頃の、都における情勢が説明される。最初に言及される平治の乱は、保元の乱により朝廷内で形成された信西一門・二条親政派・後白河院政派・平氏一門・源氏一門という勢力間の対立に起因して、1159年に勃発した戦乱である。²⁴ また、紙面には、炎に包まれた僧兵たちと、画面右上に本堂の大屋根と五重塔を小さく描く絵(図8)が配置されており、話題の中心が仏教に絞られている事を視覚的に意識させる。対応する文では、中央仏教を担う比叡山の僧兵が二つに分かれて、三井寺の焼き討ちや、興福寺僧兵との争いを起こすなど、荒れ果てた時代の延暦寺で勉強に努める栄西の様子が語られる。822年に大乘戒壇が設立され、日本仏教の中心的地位に置かれた比叡山延暦寺からは、慈覚大師円仁と智証大師円珍という名僧が輩出した。しかし、僧侶たちは、円仁派と円珍派に分かれて対立し、993年(正暦4)に円珍派の僧らが麓の園城寺(三井寺)に入る。これ以降、延暦寺の円仁派を指す「山門」と園城寺の円珍派を指す「寺門」は、武装化した僧兵により激しい抗争を展開する。10世紀末には、祇園社(現・八坂神社)を延暦寺の末寺としたことから、奈良興福寺の僧兵とも争っており、²⁵ この場面には、そうした歴史的事実が反映されている。

見開き7は、天台と真言の教えを学ぶ栄西²⁶が、仏法の衰えた末法の世を立て直そうと決意する場面となる。そのために、仏教の先進国である中国大陸の南宋で、本当の仏法を学ぼうと、28歳の春に、博多港から出発する。

続く見開き8では、生命がけの南宋渡航を成功させるため、栄西が、阿蘇

(158)

や箱崎宮といった寺社へ参拝する。ここでは、九州にたくさんの寺社仏閣があることを伝える。²⁷

また、前場面の見開き7（図2）では、現代の福岡と同様に、昔の博多も国際都市だったという文が記される。

近ごろ福岡の町では、「アジア、アジア」という声が高いけれど、
当時の博多は、宋の商人たちが盛んに行き来する、国際都市だったんだよ。
（『栄西禅師』 p.15.）

博多区がある現代の福岡市では、1987年より市制の基本構想として、アジアの拠点都市となる事を目指した国際化政策が掲げられている。²⁸ 絵本『栄西禅師』では、出版当時の福岡市と、中世の博多を重ね合わせながら、都市の繁栄ぶりを伝えるが²⁹、この点について、あとがきには、次のような記述がある。

とくに、日本で最初の禅寺ができた博多の町は、むかしから、商業だけでなく、精神的にも世界に開かれていた町なのですから。
（『栄西禅師』 p.32.）

これら、見開き7と見開き8は、見開き6の場面と対比関係にある（図9）。ここでは、荒廃した都との対比関係を意図的に表現する事で、あとがきにも記されているように、博多を中心とした九州地方には、商業が活発な国際都市や、精神的に豊かな仏教文化が存在していることを主張する。

4-2 背振山と喫茶文化

見開き9は、後に東大寺大勧進職となる重源と、中国で出会い、一緒に阿育王山へ登る場面から始まる。しかしそれよりも、この見開きで話題の中心となっているのは、栄西が中国から持ち帰った、お茶の実のことである。

茶の効能について書き記した『喫茶養生記』³⁰を著している栄西には、福

岡と佐賀の県境に連なる脊振山へ、茶の種子を植えたという逸話があり、見開き9の文章では、この事を次のように記す。

福岡と佐賀の県境に連なる背振山は、
栄西和尚が初めて茶のみをまいたことで有名だね。
だから茶（背）振山と名づけられたという説もある。
日本でのお茶の栽培の本格的なはじまりはこの時からで
京の梅尾（あとに宇治）にもこのあと伝わったということだ。

（『栄西禅師』 p.18.）

1191年に、九州の平戸へ上陸した栄西は、脊振山主峰の東南にある霊仙寺を訪れる。そこから僅かに離れた西の谷にある石上坊で種を蒔いたのが、日本における最初の茶栽培だと言われている。その後、栄西から種子を譲り受けた明恵上人が、梅尾高山寺の深瀬の園に茶を植え、これが宇治へ伝播して、宇治茶となったという。³¹

見開き9では、このような歴史にもとづく、「京の梅尾（あとに宇治）」にもこのあと伝わった」という文により、九州から日本各地へ茶の栽培が普及したことを記す。ここでは、京都との対比も再びなされており、京都よりも先行し、全国に先駆けて華開いた九州茶の歴史を誇示する。

地方にある自然環境や歴史的町並みは、地域文化の独自性を形成し、認識させる重要な要素となる。したがって、絵本『栄西禅師』で、地域のシンボリックな場所となる、栄西と脊振山の関係を紹介することは、地方の個性を誇示する方法として有効である。³²

4-3 中国での修行

見開き10の絵では、切り立った山の上に建つ寺院の様子が示されており、俗世と隔絶された空間であることを感じさせる。文章には、1187年に、二度目の入宋を果たした栄西が、臨済宗黄龍派の宗匠である虚庵懷敞と出会う場面が記される。栄西を見た虚庵懷敞は、五百年後に生き仏が東から道を求め

てくるという玄奘三蔵の予言を口にする。これは実際、玄奘に倣い、天竺を目指そうとしていた栄西のエピソードにもとづいたプロットとなる。³³

見開き11は、師事する虚庵懷敞から、釈尊の『お悟りの証』を伝えられ、禅の修行に励む場面となる。それに続く見開き12では、望郷の念に駆られ、母親を心配して詠んだ栄西の和歌が、葉が舞い散る紅葉の絵と共に紹介される。この歌は、栄西の人間性を伝えるものとして紹介されるが、木宮泰彦の『栄西禅師』にも、栄西の著述として取りあげられている。³⁴

もろこしの 梢もさびし 日の本の ははその紅葉 散りや知ぬらん
(『栄西禅師』 p.24.)

その後、修行を終えた栄西は、釈尊から伝えられてきた「お悟りの系図」、すなわち血脈図を、初めて日本へと持ち帰る。

5 九州地方における禅文化の展開

5-1 平安仏教と対比される禅文化

見開き13は、青い星空の絵を背景として、全面に文字が並ぶ画面となる。二度目の入宋を終えた栄西は、1191年に、九州平戸の葦浦へ上陸する。戸部待郎清貫という人物から富春庵を提供された栄西は、そこから九州各地へ、沢山の禅寺を建立していく。栄西が建立したと伝わる寺院は、幾つか存在するが、³⁵ このうち絵本では、香椎にある報恩寺の名前をあげている。また、文章では、栄西の禅を平安仏教と対比する関係に置いている。

権威にしがみつき俗化した「平安仏教」とは違う、
自分の心を厳しくみつめる「禅」を、九州で広めようとされたのだ。
(『栄西禅師』 p.26.)

これにより、権力を手にする事で腐敗した都の平安仏教文化を批判し、九州地方における禅文化の拡大を印象づける。³⁶

ところがこの後、禅宗の拡大を恐れた管崎の僧侶が、延暦寺の力を借りて、朝廷へ訴えた事により、禅宗停止の宣下が出される。栄西は、この事態に対応すべく、『興禅護国論』を著し、天台宗の開祖である最澄が、禅宗を取り入れていることを主張する。その件に関連して文章後半では、仏道を追究し、悟りを得られる人間の心の広大さに言及する『興禅護国論』の序文を引用する。³⁷

大なる哉、心や。

天の高き、極むべからず。而るに心は天の上に出づ。

地の厚き、測るべからず。而るに心は地の下に出づ。

日月の光り、踰ゆべからず。而に心は日月光明の表に出づ。

大千沙界（世界）、窮むべからず、しかして心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚（宇宙）か、それ元氣（万物生成の精氣）か、

心はすなわち太虚を包んで、元気を孕むものなり。

天地は我を待つて覆載し、日月は我れを待つて運行し、

四時（四季）は我れを待つて変化し、万物は我れを待つて発生す。

大いなる哉、心や

（『栄西禅師』 p.27.）

序文を引用する直前の文章には、「ここで『興禅護国論』の序の一部を読んでみようかな。（ちょっとむずかしいかもしれないけれど）、心の広さと深さについて書かれた素晴らしい言葉だよ」（『栄西禅師』 p.27.）と記されている。ここでは、ごく簡単に文の趣意へ触れているが、それ以上の詳細な解説はなく、見開き13では、意味内容の読みとりを読者へ委ねている。寧ろここでは、栄西が記した代表的著作の雰囲気を感じさせ、身体感覚へと訴える事の方に、意図の主眼が置かれていると考えられる。

5-2 既存の権力や勢力との関係

見開き14は、鎌倉幕府の将軍である源頼朝から、博多百堂の地を寄進され

た栄西が、安国山聖福寺を創建する場面となる。一方で、聖福寺には、後鳥羽天皇から「扶桑最初禅窟」と記された勅額も掲げられる。絵では、これと対応するように、かつて勅額が掲げられていた山門(図10)を大きく提示する。「扶桑最初禅窟」の「扶桑」とは日本を、「禅窟」は禅宗寺院を意味し、この勅額は、聖福寺が日本に初めて開かれた禅寺であることを強く主張する根拠とされている。³⁸

源頼朝からの寄進と「扶桑最初禅窟」の勅額は、栄西の禅宗勢力が、中央政権の朝廷と対立する武家政権の力を借りつつ、既存勢力との融和を図っていた事を暗示させる。そのような関係の構築が功を奏し、聖福寺の存在は、朝廷にも認められ、中央文化へも取り込まれていく九州禅文化の象徴的場所となっていた事が、この見開きから読みとれる。

6 仏教文化的観点から地方を論じる課題

絵本『栄西禅師』では、京の都や比叡山延暦寺と、栄西が来訪した九州地域を、幾度となく比較対比している。そこでは、中央文化に対するカウンター・カルチャーとしての地方文化という図式が浮かびあがる。しかしながら、スチュアート・ホールが主張するカルチュラル・アイデンティティの複合性に倣ったローカル・アイデンティティの概念に付きまとう問題と同じく、この作品の諸表現が、地方の独自性を明確に提示する手段となりうるかについては疑問も残る。

そもそもホールの学術的戦略は、国家共同体内部におけるマイノリティ(少数派)の観点から文化的多様性を立証するものであり、マジョリティ(多数派)という存在が前提として常に意識されている。ゆえに、この思想に同調する大堀研のローカル・アイデンティティは、文化的価値観の一元化を意味するナショナル・アイデンティティやグローバル・アイデンティティと、対義的に定義される概念となる。大堀が唱える周縁地域の多元的文化性は、一元的文化性へ傾く中央文化の求心力へ抗う反発的な力として成立する。ましてや絵本の主人公である明菴栄西は、京都に建仁寺を建立し、東大寺勸進職へも就任する等、朝廷や鎌倉幕府といった権力者が庇護する中央仏教界

で活躍した僧侶である。『栄西禅師』では、こうした既存の人物像に対して、文化的複合性の観点から新たなイメージを提示すると同時に、比較対比の表現により、中央と地方の関係を度々提示する。この点からも、作中で表現される地方の独自性は、中央文化を意識して確立している事がうかがえる。

歴史的人物として日本史の教科書にも記される栄西像は、九州地方の独自性を強調する表現に用いられているが、一方でそうした地方文化を、日本文化という更なる大きな包括的枠組みへ、一元的に回収させてしまう可能性を十分にはらむキャラクターである。このため、常に読者は、中央文化を軸とする国家的枠組を連想し、戦前・戦中における郷土研究のように、地方の独自性は、日本文化のヴァリエント（変種）として、いずれ単一的価値観へと統合されてしまうという危惧を継続的に抱えていく事となる。³⁹ 『栄西禅師』は、そうした一元的中央文化へ対抗する力動的葛藤の上で、あえて地方性の誇示を試みる絵本であると結論づけられる。同時にこの作品は、今後、地方文化の宣揚という同様の意図が設定された仏教絵本が制作される場合、中央文化と葛藤する地方文化の自立がいかなる表現として描かれるかについて、地方再生や地方創生におけるメディア利用の観点から注視しなければならないことを示している。またその際に、仏教文化がどのように活用できるのかも、十分に議論する余地があると言えよう。

(大正大学総合仏教研究所研究員)

¹ エリック・エリクソン著 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房 1973年（原著1959年）p.10. 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」（『社会科学研究61』東京大学社会科学研究所 2010年）pp.143-145. p.153. アンドリュウ・エドガー+ピーター・セジウィック編 富山太佳夫訳者代表『現代思想芸術事典』青土社 2001年 pp.24-28.

² 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」p.145.

³ スチュアート・ホール「誰がアイデンティティを必要とするのか？」（スチュアート・ホール ポール・ドゥ・ゲイ編 宇波彰・柿沼敏江・佐復秀樹・林完枝・松畑強訳『Questions of Cultural Identity カルチュラル・アイデンティティの諸問題（誰がアイデンティティを必要とするのか？）』大村書店 2001年）p.12.

- ⁴ 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」p.143. pp.148-151.
- ⁵ スチュアート・ホール「誰がアイデンティティを必要とするのか？」p.12.
- ⁶ スチュアート・ホール「誰がアイデンティティを必要とするのか？」p.12.
- ⁷ スチュアート・ホール「誰がアイデンティティを必要とするのか？」p.12.
- ⁸ 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」p.151.
- ⁹ 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」pp.152-153.
- ¹⁰ 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」p.150.
- ¹¹ 芳賀幸四郎「明庵栄西」（今泉淑夫『辞典日本の名僧』吉川弘文館 2005年）p.127. 葉貫麿哉「明庵栄西」（国史大辞典編集委員会編『日本仏教史事典』第13巻 吉川弘文館1992年）pp.509-510. 葉貫麿哉「明庵栄西」（今泉淑子夫編『国史大辞典』吉川弘文館1999年）pp.999-1000.
- ¹² 木宮泰彦『栄西禅師』国書刊行会 1977年（原著1916年）.
- ¹³ 聖福寺監修『聖福寺通史』聖福寺 1995年 pp.210-214.
- ¹⁴ 須坂新聞株式会社「須坂新聞メールマガジン vol.152」2011年12月2日 <http://www.suzakanews.co.jp/melmaga/contents/bn.php?mode=bn&id=374&melmagaid=1&no=110>（2015年12月2日閲覧）.
- ¹⁵ 田代俊一郎『〈花叢書〉Ⅰ 駆け抜けた前衛 九州派とその時代』花書院 1996年 pp.12-13.
- ¹⁶ 『栄西禅師 末法の世を生きた大きな心』奥付.『〈花叢書〉Ⅰ 駆け抜けた前衛 九州派とその時代』pp.11-31. pp.86-90.
- ¹⁷ 福元満治『出版屋の考え休むにいたり』石風社 2012年 pp.6-7. pp.47-53. pp.56-66. 福元満治『伏流の思考 私のアフガン・ノート』2004年 pp.40-42. pp.49-53. 朝日新聞「福岡はアフガンへの窓」.
- ¹⁸ 聖戒・撰 円伊・画『一遍上人絵伝 巻4』（「国会図書館デジタルコレクション」）<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2591576?tocOpened=1>（2015年12月2日閲覧）. 白井洋輔「一遍上人絵伝「福岡の市」解析」（『文化財情報学研究 第7号』吉備国際大学文化財総合研究センター 2010年3月）pp.1-32.
- ¹⁹ 榎本渉『『栄西入唐縁起』からみた博多』（五味文彦編『交流・物流・越境—中世都市研究11』新人物往来社 2005年9月10日）pp.89-94.
- ²⁰ 聖福寺監修『聖福寺通史』pp.143-153. pp.159-163. 中山喜一郎「二 聖福寺伝来資料にみる仙厓」（聖福寺監修『聖福寺通史』）pp.17-26. 中山喜一郎『仙厓の○△□：無法の禅画を楽しむ法』弦書房 2003年 p.205.

- 21 宮脇隆平『千光燦々 栄西の道』公益財団法人禅文化研究所 2013年 pp.221-229. 宮脇隆平『栄西 千光祖師の生涯』公益財団法人禅文化研究所 2009年 pp.197-210. 佐藤正彦「桜井神社と聖福寺の現地学習」(九州産業大学公開講座委員会編『九州産業大学公開講座17 多文化社会への眼差し』九州大学出版会 2000年). pp.290-293.
- 22 滑川道夫『桃太郎像の変容』東京書籍 1981年 p.42. 吉備津神社公式ホームページ「吉備津神社とは」<http://kibitujinja.com/about/> (2015年12月2日閲覧).
- 23 東京国立博物館 読売新聞社 NHK NHK プロモーション編『開山・栄西禅師八〇〇年遠忌 特別展 栄西と建仁寺』読売新聞社 NHK NHK プロモーション 2014年 p.266. 「栄西像は、頭部が異様に長く角ばった形をしている」.
- 24 田中文英「平治の乱」(平中直人編『世界大百科事典』第25巻 平凡社 1988年) p.437. 五味文彦「平治の乱」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第13巻 吉川弘文館 1991年) pp.460-461.
- 25 益田兼房「延暦寺」(平中直人編『世界大百科事典』第3巻 平凡社 1988年) pp.772-773. 石田善人「延暦寺」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第2巻 吉川弘文館 1980年) pp.427-433. 林幹弥「僧兵」(国史大辞典編集委員会編『日本仏教史事典』第8巻 吉川弘文館 1987年) pp.582-583.
- 26 米田真理子「栄西の入宋—栄西伝における密と禅—」(吉原浩人 王勇『海を渡る天台文化』勉誠出版 2008年) pp.217-221.
- 27 榎本渉『「栄西入唐縁起」からみた博多』pp.95-98. 榎本は、栄西が祈願した九州の社寺について考察を試みている.
- 28 福岡市「福岡市基本構想」<http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/37219/1/kihonkousou.pdf> (2015年12月2日閲覧). 財団法人 福岡アジア都市研究所「福岡市におけるアジア政策の過去・現在・未来 1—福岡市のアジア政策の成果を検証し「国際都市・福岡」に向けた方向性・アプローチを探る—【中間報告：基礎調査—過去と現在—】」2009年 <http://urc.or.jp/wp-content/uploads/2014/03/20Asia1.pdf> (2015年12月2日閲覧).
- 29 榎本渉『「栄西入唐縁起」からみた博多』pp.89-94.
- 30 姚国坤「栄西が天台山に赴いた経緯と茶に関する事績」(熊倉功夫 姚国坤『栄西『喫茶養生記』の研究』宮帯出版社 2014年) pp.21-45. 程啓坤『「喫茶養生記」要述』(熊倉功夫 姚国坤『栄西『喫茶養生記』の研究』) pp.121-136.
- 31 宮脇隆平『千光燦々 栄西の道』pp.203-21. 宮脇隆平『栄西 千光祖師の生涯』pp.177-179. 川頭芳雄『佐賀県郷土史物語第1輯 脊振山と栄西 大潮と売茶翁』川頭芳雄 1974年 pp.473-486. 松原哲明「栄西 大いなる哉、心や」(紀野一義『仏道の創造者』アートデイズ 2003年) pp.101-103.
- 32 大堀研「ローカル・アイデンティティの複合性—概念の使用法に関する検討—」p.156.
- 33 田沢裕貴「総論 栄西と建仁寺の品々」(東京国立博物館 読売新聞社 NHK NHK

- プロモーション編『開山・栄西禅師八〇〇年遠忌 特別展 栄西と建仁寺』) p.11.
- ³⁴ 木宮泰彦『栄西禅師』p.86.
- ³⁵ 川頭芳雄『佐賀県郷土史物語第1輯 脊振山と栄西 大潮と売茶翁』pp.487-520. 多賀宗隼著 日本歴史学会編『栄西』吉川弘文館 1970年 pp.85-86.
- ³⁶ 久野修義『日本史リブレット人027 重源と栄西 優れた実践的的社会事業家・宗教家』山川出版社 2011年 pp.42-44. 衛藤即應「栄西と道元」(『岩波講座 世界思潮 第4輯思想家』岩波書店 1928年) p.213.
- ³⁷ 藤田琢司『栄西禅師集』公益財団法人禅文化研究所 2014年 p.14. 菅原昭英「興禅護国論」(平中直人編『世界大百科事典』第9巻 平凡社 1988年) p.482.
- ³⁸ 東京国立博物館 読売新聞社 NHK NHK プロモーション編『開山・栄西禅師八〇〇年遠忌 特別展 栄西と建仁寺』p.268.
- ³⁹ 森 覚『絵本『とげぬき地蔵さま』にみる巢鴨の地域学習』(『仏教文化学会紀要第24号』仏教文化学会 2015年) pp.161-183.

【図版】

図 1 『栄西禅師』表紙と「福岡の市」

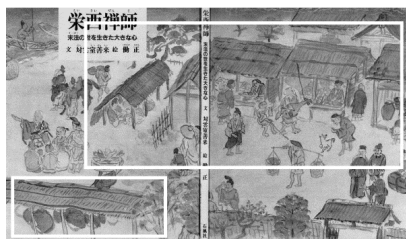


図 2 見開き 7



図 3-1 宋商人



図 3-2 琵琶法師



図 4 『華嚴宗祖師絵伝』の遣唐使船

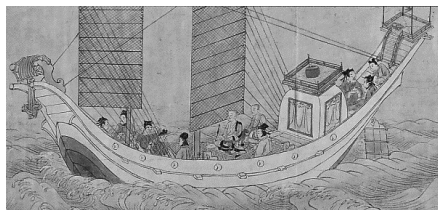


図 5 見開き 1



図 6 見開き 3



図 7 見開き 5



(168)

図 8 見開き 6

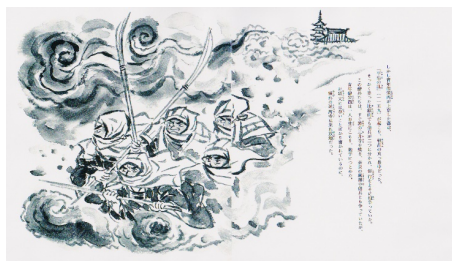


図 9 見開き 6 と見開き 7・8 との対比

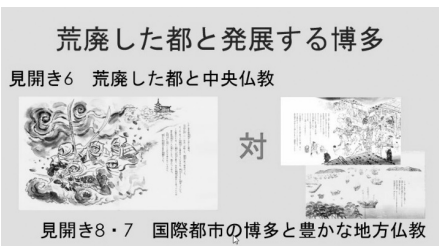


図 10 見開き 14

